（一）本荘のウノ

石屋から聞だ話だ。

横手にウノどいう人、その人居で、それが、たえすた、いろいろ術おべっだ人だどや。それが、ある時その、川端の橋、

「この橋、俺、呑んで見ひぇる」

って、ひうなんで、村の人さ、ほれ、その術見ひぇんなだっけどや。その時に、その、ある、気のきいだ若者、そのそばえ、高げぇ木あったんでしょー。そえさ登って、ウノ知らねこまえ、高げぇ木のウラ（末）さ登って見ったでぉの。すたっけ、そのウノが橋呑んだば、確かに周囲の人見れば、なるほど、こう、橋呑んだように見えるわげだ。とごろが、木の上さ上がって、こっそり見っだ人見れば、ただ、口開で、こう橋、こうやって（橋の欄干の上に伏せって、口を開いて腹這う姿）、周囲の人見れば、いがにも呑んだように見えるわげだ。とごろが上がら、こっそり見っだ人は、正体見っだでしょう。野次ったでしょう。すたっけ、その野次ったぁづ、すたば、その木がな、ずーっと、しなってくっでぉん。ずーっとしなって、川さ落づだったど。まんづほれ魔術使うどいう。すたばほれ、落づでみだども、その木など、なっても、しなっても、なんも居ねぇだけど。とごろが、魔術師が、しならせだんでねくて、自分がら、それさ引っかがって、川さ一人で落づだごどになったんだけど。とごろが、そのウノさ、ある日、旅人が来て、泊まったでぉん。

「泊めでくれ」

って言ったでぉん。

「さー、泊めでも良ども俺の家でな、なってもねー家で、なってもなくて、焚き物もねぇ」

って、そう言ったどごで、

「良ー、俺、焚き物だば何とがかんとがすー」

って、その旅人言うけどよ。そえがら、

「んだら、泊まれー」って泊めだどごで、

「まず、銭貸ひぇくえ」って言うけでぉ。すたら、銭やったば、一生懸命、自分の足削ってぉの。木っ羽コみでぇにすて、そえで、それ、火さくべれば、火ぁボカボカボカボカど燃えるわげだ。

「おー、こりゃ、まんづ、たまげだ」

その晩げぁそえで、泊まったども、翌朝見だば、そごの柱削ってくべだなだけど。それ、自分の足削ってくべったごどえ見ひぇだなだけどや。そえで、

「この者ぁ、ただの者でねー」ど思って、

「よーし」

ていうんで、今度、ウノ、術をかげで、その人ぁ、朝間え、雨コシューシューど降ったんだけども、

「まぁ、あど、行ぐ」

どって、ひうけどよ、その旅人が。そすたら、

「俺、牛貸すはげ、この牛さ乗って行げ、俺の牛だば、どごさ行って放すたて、一人しぇ、家さちゃんと来る牛だはげ」

って、そう言って、家の前さ引き出して来て、乗ひぇらっだけど。すたば、あの、その牛だかんじょすて、乗ったな、脚立で、昔、脚立マッカってあったでしょ、それさ乗ひぇでほれ、ずっかり、牛さ乗った勘定すてな。その旅人が、歌っコぐれぇで、動がねたたって旅すたつもりで、どさが行ったつもりだっけでゃー。で、村の人だ、

「何だあの人、脚立マッカさ乗って、歌っコかげで」

ったば、それ、ウノ術かげだわげだ。それでその仇取らったよな勘定なんでしょう。

そういう話。横手の話なんだけどもなー。

（採集地）由利本荘市柳生（男・明治三十七年生）